



した。同じようなことを一緒に活動する職員から言わると怒った感じで「これで良いんだ」と言つていたAさんが、第三者的な人から言われた率直な感想は素直に受け止め、軽い器を作りたいという気持ちに自然になつていきました。軽くするためには薄く削る作業では、せつかちな性格もあり割れたり、穴が開いたしまつたりと失敗を繰り返しながら、今までじっくり時間を掛けて一つの器作りに取り掛かっています。そして今は器だけでなく、身の回りにあるような物を粘土で丁寧に表現するようになり、創作が広がりをみせていました。その日の気分で活動室へ来られないと、頭に浮かんだ構想を様々な形

「この子は何も出来ないので」と家族から言われていたCさん。フリーペーパーをもらってきて、めくつていることが好きであることを聞き用意しました。職員も一緒になつて見たり、ちぎつてみたり、貼り付けてみたり、クレヨンで色付けをしたりしました。その後、Cさんはフリーペーパーからクレヨンを手にすることが増え、画用紙に穴が開くまで描

で表現し始めます。陶芸もあれば、絵画もあります。決まりはなく、自分の思いついたものを形にしているので、時には「これで完成ですか?」と思えるような作品も生まれます。作品展やコンサートでの作品販売時、「久喜地活の動物の作品が好きなんですね。同じ人が作っているんですね」とBさんの作品を求めてお客様が来られ、購入されていきます。後日、そのことをBさんに伝えますが、「あんな物が何で売れるのか分かりません。素晴らしいなんかありません」と必ず言います。Bさんにとつての創作の意義は、誰かの為、売れる為ではなく、自分の頭に浮かんだことは、思いついたことを、自分らしく表現することとそのものなのだと感じまし



「ようになつていきました。Cさんが自分で作業準備がしやすいようにして自分の物だと分かるように顔写真を付けた、本人用の画用紙に入れました。時間になるとその中から描き途中の画用紙を何枚も取り出し、テーブルに並べます。描いては違う画用紙に替え、そしてまた描くでは、まだ描き途中の作品、もう描き終えた作品と、Cさんが判断していると思える様子まで見受けられます。」
「ううになりました。そこには本人の意思というものがはつきりと映し出されています。

続けてきたことで見えてきたこと

(昭和54年3月10日第3種郵便物認可)

おひさま通信

その人らしい 時間を大切に

久喜市地域活動支援センター
たいよう

「久喜地活の陶芸作品が好評です
よ！作品をもつと出品したいので、
今度持ってきてください」と工房集
の職員から嬉しい連絡が入りました。
工房集が開設したオンラインショッ
プB A S Eで、久喜市地域活動支援
センターみたいよう（以下久喜地活）
の陶芸の作品が少しずつですが売れ
ています。インターネットの画面に
素敵に掲載されている作品の姿を見
るだけで、仲間も職員も心躍ります。
数日後、作品の写真をクリックする
と「S O L D O U T」の赤い文字。
驚きの表情と声が活動室に響いてい
ました。

久喜市地域活動支援センター
たいよう

「久喜地活の陶芸作品が好きだ！」作品をもつと出品した
度持つてきたださい」と、職員から嬉しい連絡が入り、
房集が開設したオンライン
BASEで、久喜市地域活
ンターたいよう（以下久喜）
陶芸の作品が少しずつであります。インターネットの
敵に掲載されている作品の
だけで、仲間も職員も心躍ります。
数日後、作品の写真をクリッ
ク、「SOLD OUT」の赤
焼きの表情と声が活動室に響
きました。

目を迎えていきます。受託当初の様子は、主に身体障害の方が通所し、迎、入浴、排泄の介助、食事提供を受ける場所というイメージでした。しかし、仲間たちも、生活に必要なサービスを受ける場所として久地活を捉えていたように思います。久喜地活での活動は大きく分けて、久喜地活（創作）、機能訓練（リハビリ）、趣味活動（創作）、機能訓練（リハビリ）、文化活動（外出やレクリエーションなど）、入浴があり、1日の活動は機能訓練と趣味活動、入浴という形で行われています。趣味活動の時間は、いくつかの創作が提案されていましたが、あまり積極的に行われている様子はなく、何もせずに過ごしていました。仲間が多くかったです。何か創作するとなると、自分で材料費を支払う作つたものを持ち帰るという仕組みで、仲間は必要がないならば作らなければ、何をやらないということになると分かりました。また、法人内の他の事業所では、こんな仕事を

「ここで仕事をするの？何で？」と仲間の反応が返ってきました。何かをやらなければ（やつてもらいたい）という職員の気持ち、何かをやつてもらわなければ（やつてもらいたい）という職員の先走った気持ち。双方がなかなか噛み合わず、仲間よりも職員の気持ちの方が焦っていたように思います。

そうした中で大切にしたことは通所している時間が誰にとつても有意義な時間と感じられるようにするということでした。通所してから帰るまでの時間は全て活動と捉え、創作も仕事ではなく、それぞれが楽しめる、取り組める活動をという考え方から、「趣味活動」という形を継続することにしました。決められたことを行うのではなく、自分の好きなことをやろう、皆で一緒に考えてみようということを大切にしました。すると、相手のことを考え、仲間からこんなことはどうかな、一緒にやつてみようという声が聞かれるようになつてきました。今でも、活動室では創作だけでなく、ゲーム（黒ひげ危機一髪やオセロ等）が行われることがあります。活動室に来て、皆の様子を見て部屋を後にする仲間もあります。会話が楽しくなり、「今日は手じやなくて、口が動いているね

本人らしく、やりたいことを
やつてみよう

